

70年代のニューヨークにおけるディスコとクィアカルチャー

22c1131 上田光太郎

研究テーマの背景

私は以前からディスコと呼ばれる音楽に関心があり、普段から好んで聴いている。先日、ディスコの流れるイベントへ初めて足を運んだ際に、少なくない数の同性カップル達がフロアで踊り、バースペースで誘い合う光景から、驚きと共にディスコとクィアコミュニティの関係性について興味が湧いたことがこの研究テーマでゼミ論を書くに至った起点である。

私自身はヘテロセクシャルであり、クィアカルチャー/コミュニティに精通しているとは言えない部分があるが、一人のディスコ好きとして同じくディスコフリーク、もしくはディスコのイメージをあらゆる意味で白人化、ヘテロ化された日本のバブル期に流行したものと認識している方に読んでもらいたい。

研究目的

1970年代に興隆したディスコは、単なる音楽ジャンルとしての枠を超え、アメリカにおけるマイノリティ、とりわけクィアカルチャーにとって文化的にも社会的にも重要な現象となった。ニューヨークを中心に展開されたこの運動は、性的、社会的、民族的なマイノリティが自己表現を追求する空間を提供し、特にクィアコミュニティに深い影響を与えた。本論文では、ディスコの発展とクィアカルチャーとの関係を、歴史的背景、音楽の役割、また『サタデーナイトフィーバー』のブームが与えたディスコへの影響、そして1979年の「DISCO SUCKS(ディスコはクソ)運動」を含む社会的な反発に焦点を当てて分析する。これにより、ニューヨークにおいてディスコがいかにしてクィアカルチャーの一部として進化し、また後世にどのような影響を与えたのかを探る。

第1章：ディスコの起源と社会的背景

今日、<ディスコ>というキーワードは、(1) ナイトクラブ、(2) ダンス音楽の様式、この2つの意味で流通している。少々ややこしいが、これには(1) 40年代頃からバンドの代わりにレコードを再生するナイトクラブとしての<Discotheque>のあり方が変容していき、(2) 70年代に入るとその空間で好まれたサウンドをベースにした音楽の様式=ディスコ・ミュージックが作られるようになっていった、という経緯がある。その語源は、40年代初頭のパリにオープンした<La Discotheque>と言われており、<レコード=Disc>と<ライブラリー=Bibliothèque>を掛け合わせた造語から生れたようだ。(bouncebook,2007)

ディスコの文化的背景には、1969年のストーンウォールの反乱という重要な出来事が存在する。ストーンウォールの反乱とは、ニューヨーク市のグリニッジ・ヴィレッジにあるストーンウォール・インというバーで起きた警察による弾圧に対して、ゲイ男性やレズビアン、トランスジェンダーの人々が集団で反抗した事件である。1969年6月28日の夜、警察がゲイバーを急襲した際、常連客たちはこれに対して激しく抵抗し、暴動に発展した。この反乱は、ゲイコミュニティの権利を求める運動の転換点となり、同性愛者の社会的・政治的権利向上を求める声を強めるきっかけとなった。ストーンウォールの反乱後、ゲイ解放運動が本格化し、ゲイパレードが始まるなど、クィアカルチャーが公然と社会の中で表現されるようになった。

ディスコがその後の1970年代にクィアカルチャーの中心的な役割を果たすことになった背景には、こうした社会的変革の流れがあった。特に、1971年にニューヨーク市で同性間のダンスを禁止する法規制が撤廃されると、ディスコは公然とクィアカルチャーの象徴的な場となった。これにより、ディスコはゲイコミュニティにとって安全で自由な空間となり、ストーンウォールの反乱後の解放感と連動して、その存在感を強めていった。

その象徴的な存在が、デヴィッド・マンキューソ (David Mancuso) の「The Loft」である。The Loftの始まりは、1970年2月14日土曜日に遡る。マンキューソは『Love Saves the Day』というバレンタイン・デーのパーティーを催し、ありとあらゆる音楽を含んだ幅広い選曲で客を楽しませた。また、ティモシー・リアリーの思想に傾倒していたマンキューソは、瞑想体験を探求し、その後にソーホーの自宅でダンス・パーティーを開く。その会員制パーティー＝<The Loft>は、ナイトクラブというよりレント・パーティー (20年代より黒人居住区で行われていた、家賃収入補填を兼ねて行われたホーム・パーティー) の伝統を参考にした、客の寄付によって成り立つコミュニティ意識の高い、無許可営業のプライベート・パーティーであった。

どんな人でも歓迎されるこのパーティーには公民権運動、ゲイ解放運動、フェミニスト運動、そして反戦運動の人々も流れ込み、フロアには実にカラフルな客層が集まった。そしてマンキューソが子供の頃にいた養護施設で、子供たちのために定期的にパーティーを催していた Sister Alicia というシスターの影響で、彼は社会に除け者にされた人たちを家族のように扱うことに揺るぎない信念を抱き、パーティー会場を子供のバースデー・パーティーを彷彿させるようなデコレーションで彩り、音響設備へのこだわりや、物語性のある選曲も後進のディスコやDJに大きな影響を与えた。

また、ディスコは単なる音楽のスタイルにとどまらず、当時のアメリカ社会における抑圧的な価値観に対する挑戦でもあった。ディスコは、ソウル、ファンク、ラテン音楽など多様なジャンルを取り入れ、それぞれのリズムとメロディが、性別や人種を超えた普遍的な魅力を持っていた。音楽的な革新も、ディスコの発展において重要な役割を果たした。特に12インチシングルの登場により、DJはリズムの流れを維持するためにレコードとレコードの間を滑らかにミックスしたり、ダンサーが特に気に入った部分を延長するために同じレコ

ードを2枚購入したりするようになった。その結果、非合法的な音楽制作の形態が出現し、従来の生バンド等のパフォーマーは、即興的なDJの姿に取って代わられた。パフォーマーの不在とDJの相対的な匿名性のおかげで、ダンサーたちはパフォーマーの視覚によるイメージではなく、より音楽自体に反応するようになり、この事は、ヴォーカリスト、ミュージシャン、プロデューサーがリスナーよりも高い位置にいるという音楽産業の階層的な基盤を揺るがした。

第2章：ディスコの発展と大衆化

1970年代、ディスコはクィアカルチャーを中心とした音楽シーンから発展し、やがて世界的な現象へと成長した。この時期におけるディスコの進化は、マイノリティが生み出した文化が、白人、ヘテロの主流に吸収される過程を示し、その結果、ディスコは多様性と商業化の両面を併せ持つ存在となった。

後に彼がここでプレイした音楽がガラージというジャンルになるDJのラリー・レヴァン(Larry Levan)が1977年のオープンから1987年9月の閉店まで常駐した「Paradise Garage」(The GarageもしくはGay-rageとも呼ばれる)は、先述したマンキューソの「The Loft」をモデルに発展した。ガラージは会員制のクラブであり、入場するには会員の紹介が必要だった。また、酒は提供されず(LSD入りのパンチやコカインなど数多の薬物は蔓延していたようだが)、食べ物や飲み物の販売もなく、ここはこのクラブで音楽と身体が一体となる体験を作り上げ、聴衆に新たな音楽の可能性を提示した。

一方、「Studio 54」は、Paradise Garageとは対照的な性質を持つクラブであった。この場所は裕福な白人層やセレブリティを中心とした特権的な空間であり、豪華な演出と厳しい入場基準で知られていた。当時のディスコの象徴的なバンドであるChicの共同プロデューサーの二人、ナイル・ロジャース(Nile Rodgers)とバーナード・エドワーズ(Bernard Edwards)がStudio 54に出向いた際、ドアマンに入場を拒否されたのちロジャースの自室に戻り、憂さ晴らしで「Fuck off」と歌いながらジャムセッションをした際に生まれた曲が『Le Freak (邦題：おしゃれフリーク)』というエピソードがある。

ここでは、ディスコがクィア、マイノリティのカルチャーから切り離され、エンターテインメント産業の一部としての傾向が強まった。この二つのクラブは、ディスコが持つ多様な顔を象徴している。前者はマイノリティの解放を、後者は商業的成功と特権化を表していた。

また、ディスコ文化の大衆化を最も象徴する出来事の一つが、1977年公開の映画『サタデー・ナイト・フィーバー』である。この映画は、ニューヨークの労働者階級の青年トニーを主人公に、彼が週末にディスコで自己表現と自由を追求する姿を描いている。主演のジョン・トラボルタによるダンスパフォーマンスとディスコ音楽の融合は、映画を通じてディスコを世界的なブームに押し上げた。しかし、この映画が描いたディスコは、その文化的な背景を単純化したものであり、主にヘテロ的な視点に基づいていた。クィアカルチャーやマイ

ノリティによるディスコの形成という重要な側面は、物語の中心から排除され、ディスコが持つ多様性は見過ごされた。また、サウンドトラックの A 面は白人グループのビージーズで占められ、ディスコは癩に障るポップスだという印象を抱かせるものだった。それでも映画の影響により、ディスコは広範な人気を獲得し、音楽やファッションを中心とした一大現象となった。

こうして 1970 年代後半、ディスコはファッションや広告、エンターテインメント産業を巻き込んだ商業的な現象へと変化した。多くのディスコクラブが開設される一方で、ディスコの根底にあったコミュニティ形成や社会的な解放という意義は薄れていった。Studio 54 のようなエリート主義的なクラブがディスコの象徴となり、元来のクィアカルチャーに基づくユートピア的な側面は、次第に商業的な成功の影に埋もれることとなった。

それでも、「Paradise Garage」のようなディスコでは、依然としてディスコがコミュニティと結びついた形で生きていた。これらの空間では、音楽が身体と心の解放をもたらし、差別や偏見を乗り越える手段として機能した。ディスコの商業化が進む一方で、そのルーツを尊重する場所では、ディスコの革新性が守られていた。

第 3 章：ディスコ時代の終わり

1970 年代後半、ディスコ文化は音楽業界やエンターテインメント産業において絶大な影響力を誇っていた。ダンスフロアは、ジェンダー、セクシュアリティ、エスニシティといった社会的な境界を越え、多様な人々が自由に自己表現を行う場であった。しかし、過剰な商業化がディスコの本質を希薄化させる一方で、保守的な層からの反発が表面化し、その影響力は徐々に弱まっていった。

その分水嶺となったのが、1979 年 7 月 12 日にシカゴのコメスキー・パークで開催された「Disco Demolition Night(ディスコ・デモリッション・ナイト)」である。このイベントは、当時シカゴのラジオ局 WLUP のディスクジョッキーを務めていた Steve Dahl と、そのパートナーである Gary Meyer によって発案された。イベントでは、聞かなくなったディスコのレコードを持参した来場者の入場料を 98 セント（当時の日本円で約 210 円）に設定。集められたレコードは、ダールが観衆の目の前で「爆破」という派手な演出が行われた。集まった群衆は「Disco Sucks」というスローガンを叫びながら、ディスコ文化への嫌悪をあらわにした。この出来事は単なる音楽ジャンルへの批判にとどまらず、ディスコを支えていた黒人、ラテン系、そしてゲイコミュニティに対する社会的偏見の表出でもあった。ディスコの多様性と包摂性は、この運動によって否定され、主流社会の保守的な価値観が再び力を強める結果を招いた。

さらに、1980 年代初頭に訪れたエイズ危機は、クィアコミュニティに壊滅的な打撃を与えた。この流行は公衆衛生の問題にとどまらず、ゲイコミュニティに対する社会的偏見を一層強化する要因となった。エイズ危機により、多くのディスコクラブが閉鎖を余儀なくされ、

クィアカルチャーに根ざしていたディスコ文化の発展は停滞を余儀なくされた。

それでもなお、ディスコが持っていた包摂性や創造性は完全に消えることはなかった。ニューヨークの「Paradise Garage」やシカゴのハウスミュージックシーンは、ディスコの精神を受け継ぎつつ、エレクトロニックな要素を取り入れた新しい音楽を生み出していった。これらの動きは、ディスコの遺産を単なる過去のものにせず、未来の音楽の基盤として再構築する役割を果たした。

ディスコ文化の衰退は、単なる終焉ではなく、その多様性と自己表現の意義を問い直す契機でもあった。現代の音楽やカルチャーシーンにおいて、ディスコの影響はなおも生き続け、多様性を祝福する場としての役割を再び担おうとしている。反ディスコ運動やエイズ危機に直面しながらも、ディスコ文化のエッセンスはその後の音楽やサブカルチャーに深い影響を与え続けた。ハウスミュージックやテクノなど、ディスコの精神を受け継いだジャンルが1980年代以降に台頭し、それらの音楽が再びクィアカルチャーの重要なプラットフォームとなった。

また、反ディスコ運動が残した傷跡は、ディスコ文化を再評価する動きにつながった。現代においては、ディスコの歴史的な意義やその多様性への貢献が見直されており、当時の音楽やファッションが持つ美学は、ポップカルチャーにおいても重要な遺産として生き続けている。

ディスコは終わりを迎えたように見えたが、実際にはその精神が形を変えて生き続けている。反ディスコ運動やエイズ危機のような困難を経験したからこそ、その価値はより鮮明に浮き彫りにされ、今なお文化や社会に影響を与えている。

第4章：ディスコが現代に与えた影響

ディスコは1980年代以降、商業化や社会的反発を受けて衰退したが、その遺産はハウスやテクノといった音楽ジャンルに受け継がれた。シカゴの「Warehouse」やデトロイトのアンダーグラウンドシーンでは、ディスコのリズムと感性が電子音楽の形で再生され、現代のクラブミュージックの基盤を築いた。

ハウスミュージックは、ディスコの持つ自由な身体表現と反復的なリズムを継承しつつ、シンセサイザーやドラムマシンを取り入れて進化を遂げた。特に Frankie Knuckles（フランキー・ナックルズ）は10代の頃からの Larry Levan の友人であり1977年になると、クラブオーナーの Robert Williams に招かれ、クラブ「Warehouse」のオープニングナイトでDJを務めた。その後はウェアハウスのレジデントDJのオファーを受け、フランキーはNYからシカゴへ活動拠点を移し、82年までレジデントDJを務め、当時会員制のマニアックな黒人向けのゲイクラブであったウェアハウスを人気クラブへと成長させた。

近所のレコード屋では、フランキーが流していた「ウェアハウスっぽい音」を求めるDJや客の要望が殺到したため、店主が「ウェアハウス」と掲げたコーナーを作ったのが「ハウス

ミュージック」の語源と言われている。

そして、ハウスについてナックルズはこう述べている。「ハウスは、ディスコの復讐なんだよ」

テクノも同様に、ディスコの「解放」というテーマを未来的なサウンドで表現し、デトロイトの黒人アーティストたちによって進化させられた。これらの音楽は再びクィアコミュニティの場所として機能し、現代のクラブシーンの中核を成している。

ディスコは音楽だけでなく、ファッションにも影響を与えた。70年代のディスコファッションは、ジェンダーの境界を越えたスタイルが特徴であり、煌びやかな衣装や化粧はクィアカルチャーの自己表現を象徴していた。このスタイルは現代のポップカルチャーやファッションデザインに再解釈され、ドラッグクィーンの文化や、クィアコミュニティにおけるパフォーマンスアートとして息づいている。

特に「RuPaul's Drag Race (ル・ポールのドラッグ・レース)」のような現代のエンターテインメントは、ディスコの視覚的な美学を継承しながら、クィアアイデンティティの表現をメインストリームに押し上げた。また、ファッションブランドがクィア文化をインスピレーションの源とすることも増え、ディスコが生んだ「自己表現の自由」という価値観が広く社会に浸透している。

さらに、音楽に関しても現代のミュージシャンやプロデューサーはディスコサウンドをサンプリングし、新たな形でポップミュージックやクラブシーンに取り入れている。例えば、90年代後半にフレンチ・ハウス・ムーブメントの一つとして人気を博した Daft Punk は90年代にデビューした当時から往年のディスコやファンク、ロックからのサンプリングを多用した楽曲を発表していたが、2013年に発表したアルバム、『Random Access Memories』ではゲストに Chic のナイル・ロジャースを迎え20カ国のチャートでトップになった。そのリードシングルである「Get Lucky」は、30カ国以上のチャートでトップになり、史上最も売れたデジタルシングルの1つになった。そうして当時のディスコサウンドへのトリビュートと共に現代におけるディスコの新しい文脈で再発見される価値のある音楽文化として再定義した。

現代におけるディスコの影響は、Daft Punk だけでなく、他のアーティストにも広がっている。Dua Lipa の『Future Nostalgia』(2020年)や、Jessie Ware の『What's Your Pleasure?』(2020年)は、ディスコサウンドを基調としながらもポップやエレクトロニカの要素を取り入れた作品で、批評家からの高評価を得た。また、Beyoncé の『Renaissance』(2022年)は、ハウスやディスコのサウンドをフィーチャーし、ブラックやクィアカルチャーのルーツに敬意を払う内容で、ディスコを再び主流に押し上げた。

ディスコはそうして、誕生から数十年を経た今も、クィアコミュニティの文化的な遺産として生き続けている。ディスコフロアが提供した「解放」と「連帯」の精神は、今現在も音楽、ファッション、デジタルカルチャーの中に広がっている。クィアコミュニティにとって、ディスコは単なる音楽ではなく、自己肯定と抵抗の象徴であり続けている。

現代におけるディスコの再評価は、抑圧に抗いながらも文化を創造し続けた人々へのオマージュであり、その精神はこれからも未来へと継承されるだろう。ディスコは過去の遺産であると同時に、現代と未来をつなぐ文化的灯火として、社会における多様性と包括性の価値を再認識させるのである。

結論

ディスコは 1970 年代にその文化的ピークを迎え、クィアコミュニティを含む多様な人々に自己表現と解放の場を提供した。ディスコのダンスフロアは、性的、民族的、社会的な境界を越えたコミュニケーションと連帯感を生み出す空間であり、特にゲイコミュニティにとって、抑圧からの解放と喜びの象徴的な場であった。

しかし、ディスコが提供した自由は、商業化や社会的な反発の波にさらされることとなった。ディスコブームがもたらした過剰な商業化は、音楽の本質を歪め、大衆的な受容とマイノリティの文化的基盤との間に緊張を生んだ。それでもなお、ディスコのクィア文化的側面は、1980 年代以降のハウスやテクノなど、新たな音楽ジャンルに形を変えながら生き続けた。

ハウスミュージックの誕生地であるシカゴでは、フランキー・ナックルズなどの DJ たちが、ディスコの精神を受け継ぎながら新しいサウンドを創造した。この音楽は、再び地下文化の中で進化を遂げ、特にゲイコミュニティに支持されるとともに、より広範なダンスミュージックの基盤を築くこととなった。また、テクノの誕生地であるデトロイトでは、機械的で反復的なビートを通じて、ディスコの未来志向的な側面が再解釈された。これらのジャンルはディスコの遺産を継承しながら、新たな形式で多様性と自己表現を祝福している。

さらに、ディスコの影響は音楽だけでなく、ファッションや視覚表現、クラブカルチャーにも浸透している。現代のポップカルチャーでは様々なミュージシャンがディスコの美学を作品に取り入れるなど、その遺産を明確に反映している。また、2020 年代においても、ディスコリバイバルの動きが見られ、クィアコミュニティを中心に再び注目を集めている。このことは、ディスコが単なる過去の文化ではなく、現代においても新しい可能性を秘めた持続的なムーブメントであることを示している。

ディスコは、音楽、ダンス、視覚芸術を通じて、社会的変革と多様性を推進する重要な文化的現象であった。その歴史を振り返ると、ディスコは商業化や反発の中でも、本質的な自由と包摂性を失わず、現在の音楽や文化に多大な影響を与え続けている。この遺産は、未来においても新しい形で進化し、クィアコミュニティを含むすべての人々にとってインスピレーションを与え続けるだろう。

参考文献

Richard Buskin, (2005), Classic Tracks: Chic 'Le Freak'

<https://www.soundonsound.com/techniques/classic-tracks-chic-le-freak>

NYC LGBT Historic Sites Project

<https://www.nyclgbtsites.org/site/paradise-garage/>

Tim Lawrence, (2011), Disco and the queering of the dance floor

[https://www.researchgate.net/profile/Tim-Lawrence-](https://www.researchgate.net/profile/Tim-Lawrence-3?_tp=eyJjb250ZXh0Ijp7ImZpcnN0UGFnZSI6InB1YmxpY2F0aW9uIiwicGFnZSI6InB1Ym)

[xpY2F0aW9uIn19](https://www.researchgate.net/profile/Tim-Lawrence-3?_tp=eyJjb250ZXh0Ijp7ImZpcnN0UGFnZSI6InB1YmxpY2F0aW9uIiwicGFnZSI6InB1YmxpY2F0aW9uIn19)

フランキー・ナックルズの功績、そしてハウス・ミュージックは文化をいかに変えたか

<https://www.ele-king.net/columns/003719/>

Manya Johnston-Ramirez, (2020), Disco and Gay Culture in the 1970s

<https://storymaps.arcgis.com/stories/bc4fa3c026e24ed0bd724fe588bf1aa7>

Piotr Orlov, (2020), Still Saving The Day: The Most Influential Dance Party In History

<https://www.npr.org/2020/02/19/807333757/still-saving-the-day-the-most-influential-dance-party-in-history-turns-50>

bounce book, (2007) 『ALL ABOUT DISCO MUSIC』, エフエム東京, 188p

Mel Cheren, 浅沼優子訳, (2006) 『パラダイス・ガラージの時代 上巻』, ブルースインターア
クションズ, 304p

Mel Cheren, 浅沼優子訳, (2006) 『パラダイス・ガラージの時代 下巻』, ブルースインターア
クションズ, 320p